

モラエスの庭

— (6) モラエスの目：徳島の風景 —

宮崎隆義, 石川榮作, 佐藤征弥, 境泉洋

徳島大学大学院総合科学研究部

〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Moraes's Garden

— (6) Moraes's Eyes: Tokushima Landscape through his Eyes —

Takayoshi Miyazaki, Eisaku Ishikawa, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University

1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Abstract

This paper is part of the results from the social action activities financed by the Faculty of Integrated Arts and Sciences, and Tokushima University, 2015. The activities are mainly focused on the reevaluation by public lectures and other exhibitions of Wenceslau de Moraes 1854-1929, a Portugal naval officer and consul general who lived and died in Tokushima. This is also part of the outcomes of the Project Studies by Moraes's Studies Group launched on July 31, 2010.

The members of Moraes's Studies Group, T. Miyazaki (English Literature, Comparative Literature), E. Ishikawa (German Literature, Comparative Literature), M. Satoh (Plant Physiology), M. Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University, have been continuing to try to analyze Moraes's works and to approach new facets of Moraes's biographical aspects. Moraes was fascinated by the far-east Japan and fell in love with Ó-Yoné, who died soon after the marriage. After her death, Moraes decided to live in Tokushima, which was Ó-Yoné's hometown. He lived with Ko-Haru, Ó-Yoné's niece, for a while until she died from tuberculosis at the age of 21. His life until his death in Tokushima was a kind of a hermit, disregard of his fame as Consul General and Navy high-rank Officer of Portugal, and other financial merits entailed with them. Moraes published *O "Bon-odori,, em Tokushima* in 1916 after Ó-Yoné died, and *Ó-Yoné é Ko-haru* afterwards. In both works Moraes depicted Tokushima landscape and everyday things in general which his eyes caught through his keen sensitivity. He worshipped Japan's unique beautiful landscape, but he was disappointed at the rapidly westernized aspects of large cities like Kobe, Osaka and Tokyo. He had been, in a sense, allured and attracted by the old and beautiful landscape through the writings by his foregoing visitors to Japan. His choice of Tokushima as his residence for his remaining days might be considered to search for the old and traditional beautiful aspects of Japan that seemed to him to be remaining in a local city like Tokushima far away from the large cities. Moraes's sense of beauty through his eyes to Tokushima landscape may lead us Japanese to consider our identity in this now globalized society.

Key Words: Wenceslau de Moraes, *O "Bon-odori,, em Tokushima*, *Ó-Yoné é Ko-haru*, landscape, Tokushima, garden

1. はじめに

本研究は、平成 27(2015)年度総合科学部創生研究プロジェクト(部局長裁量経費)「グローバリズムとモラエス——モラエスが世界に広げた「徳島の自然・人・心」の再構築——」、平成 27(2015)年度地域交流プロジェクト(部局長裁量経費)「モラエス館所蔵資料活用によるモラエス顕彰事業プロジェクト」、並びに徳島大学学長裁量経費平成 27(2015)年度パイロット事業支援プログラム(社会貢献事業)(継続)「徳島県・明治大学との連携によるモラエス顕彰事業の整備と充実」による研究成果の一部である。

本研究論文の目的は、プロジェクトの一環として開いている「徳島大学総合科学部モラエス研究会」の基本的な活動である例会・読書会での成果を基にして、モラエスの著作について新たな考察を加えることである。同時に、モラエスの顕彰活動を通じ、文人外交官モラエスの実像について新たな側面を見出し、グローバル化を迎えた現代において、徳島におけるモラエスの存在の意義を問い直しつつ、文化面で地方創生に寄与できるかを問うことも視野に入れている。

モラエスは、日本の日記文学、随筆文学に傾倒しながら、「随想」として徳島とそこに住む人々を眺め『徳島の盆踊り』(*O "Bon-odori" em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*)を著し、ポルトガルの『ポルト商報』(*Comércio do Porto*)に連載発表した。さらにその後の『おヨネとコハル』(*Ó-Yoné é Ko-haru*)では、若くして亡くなったふたりの女性を悼み追想しているが、そこには平凡な庶民の生活を眺めている異邦人モラエスの視線が感じられる。追想であるがゆえに、いずれの作品においても、現実の風景に対し、過去への追想として、心眼を通した記憶の風景が重ねられているといつてよい。

本論文では、モラエスの、徳島における著作の『徳島の盆踊り』と『おヨネとコハル』について、モラエスの目に映った、特に風景や風物というものを中心にして、モラエスの風景や風物の捉え方、そしてそこから浮かび上がってくるモラエスの感性と日本人の感性の違い、さらには日本人が気づいていない独特な心性というものを検証してみたい。それによって、グローバリズムの時代を迎えている現代において、日本人であること、日本という国のありようが見えてくるかも

しれない。

2. 徳島来住ということ

ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーザ・モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)は、1913年7月4日に徳島にやって来て、その後亡くなるまで徳島に住み続けた。モラエスが、徳島の地をどのような目で見ているかについては、これまでも論じてきたが¹、ここではもう少し別の観点から、モラエスの目、まなざしを追ってゆきたい。モラエスが、地方都市である徳島とそこに住む人々、その風景を、西洋化がまだなされていない古くからの風景が残るものとして見ているところに、明治以降、西洋化、言い換えればある意味でのグローバル化ということに翻弄され続けてきた、もしくは今も翻弄されているわれわれ日本人が、日常の中で見えていて気づかなかったもの、あるいは現在でも気づいていないものを見ていた可能性がある。

私のいる徳島は、大阪・神戸といった大都会からさほど遠くない四国の島の海岸の穏やかな町である。しかし、町の人たちは、すべての島国の人がたいていそうであるように、自分たちの風習に関してひどく保守的で、岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている。(22)²

日本各地には、その土地の伝統や、その土地でのしきたりや習慣などが今でも根強く残っている。方言や風習、習慣はもちろん、食べ物やその味などは、たとえ居住地が変わろうともなかなか変わらないのが実情である。それは当たり前といえば当たり前のことであるが、それが「ひどく保守的で」「伝統にしがみついている」ということに、つまりは容易に考え方を変えることができないということ、変化や異質なものを簡単に受け入れることができない、ということにも通じていることに、実はあまり気づいていない。表面上は、欧米の衣服を身にまとい、欧米の流行をすぐさま取り入れ、食習慣もほとんど何もかも欧米化されながら、われわれ日本人の根底にある考え方、感じ方は実はあまり変わってはおらず、むしろ頑なに「岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている」のである。

¹ 拙論、「モラエスの庭 (1)~(5)」『地域科学研究』(徳島大学総合科学部)、第1~5巻。

² 本文中の引用は、断りのない限り、ヴェンセスラウ・

デ・モラエス、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』(ことのは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年)に依り、括弧書きで頁を示す。

いわゆる文化とか伝統という言葉は、すこぶる抽象的である。その言葉が表すものが、芸能であったり、食習慣であったり、名所や特有の珍しい見ものであったり、習慣やしきたり、さらには方言や生活様式であったりと、複雑多岐にわたるものであって、一言では捉えどころがないともいえる。モラエスが指摘している「伝統」(tradições)³はそうした複雑多岐にわたるものであって、それを知るということは、ただ見て観察するだけでなく実際に日常の生活を送ってみるしかあるまい。モラエスが目指したものはそういうものでもある。

モラエスは鴨長明の『方丈記』について、次のように書いている。

鴨長明は、京都で我が目で見たことに基づいて、凶作の結果である一一八一年の飢饉と、それに続く一年後の疫病のことを著書に書き残している。この点について彼は言う。

「帽子をかぶり履きものを履いた身なりのよい人たちがさえも、一軒ごとに物乞いをして歩いた。よくも立ってられるなあとこちらが驚いている間に、衰弱のあまりがっくりと倒れてしまうことがよくあった。扉に寄りかかり道ばたに身を横たえて飢え死にする人の数は数え切れない。死体を取り除かないので、町は恐るべき悪臭を放っていた。そのような腐肉にみちた光景には目をそむけるほかなかった。・・・」 (43)

『徳島の盆踊り』が、ほぼ1年の期間を捉えて書かれたものであることは、この『方丈記』をある程度意識したものであろう。『方丈記』が随筆でありながら、災害を描いた記録の作品でもあることはよく知られているが、自然災害によって、身分ある人々と下層の人々との差がほとんど無くなっていることにも注目すべきである。自然災害による社会秩序の崩壊によって、身分の差が消え、いずれは腐肉に至る丸裸の人間のみが存在することになる。鴨長明はそれを自分の境遇とともに、達観して客観的に見つめている様子が上の文書からもうかがえる。

モラエスは、神戸での総領事を辞しポルトガル海軍の軍籍を離脱してまで徳島にやって来たが、この時の

彼はあたかも鴨長明と同じ心境で徳島を眺めている、あるいは眺めようとしたといえる。「零の免状」ということをモラエスは作品中で鴨長明に関わり強調するように述べているが⁴、「零」であるがゆえに偏ることのないまなざしであらゆるものを眺めることができるのである。その点では、神戸や大阪のように、西洋風の建物が立ち並び、欧風化されているいわば虚飾で覆われた町よりも、地方都市を眺めることによって、日本の本質、日本人の心性を考え捉えようとしたのであろう。海軍軍人として、後には外交官、領事、総領事としての職についたモラエスは、極東や日本の事情をつぶさに観察し、職務としてあらゆる情報を収集しながらも、そこに住む人間たちの心性を探ろうとしている。それが『極東遊記』や『日本通信』などに形として結実したのであろうし、集大成としての晩年の『日本精神』は、まさにモラエスが「零」のまなざしで眺めた日本人の心性のあり方であったといえる。その点では、都会よりも田舎、地方都市のほうが目的には合致している。モラエスが、神戸を離れようと決心した時、松江や徳島を候補地として考えたのも頷けるのである。

いずれにしても徳島は、日本の、主として本州の他の地方都市と異なるような顕著な特徴をもたない地方都市である。 (59)

『徳島の盆踊り』では、おヨネの生まれ故郷で、おヨネの墓が建立された徳島にやって来ながら、表面的には私情に囚われず偏ることのないまなざしで、徳島が「本州の他の地方都市と大きく異なるような顕著な特徴を持たない地方都市」として眺めることに徹している。そしてその地方都市において、実際に四軒長屋の一室を借り長屋住まいをして庶民として生活することによって、ポルトガルの読者は、モラエスの書き物から文字を通して、日本の地方都市のイメージを思い浮かべたであろう。さらにはポルトガルを含めヨーロッパの人々が、「岩場の牡蠣のように伝統にしがみついている」古き良き日本についてのイメージを形成し、理解するに至ったことであろう。おそらくモラエスがこの作品『徳島の盆踊り』に込めた意図は、「徳島」という具体的な地方都市を取り上げ、そこに庶民

³ W. de Moraes, *O "Bon-odori, em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*. PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916, p. 6.

⁴ 『徳島の盆踊り』, 187-8頁.

として実際に住み暮らすことによって、日本の、急速に西洋化されつつある大都市ではない旧き良き地方都市を描き出して、日本の旧き良き姿を紹介することであつたらうと思われる。神戸で知り合ったおヨネや、徳島で関わりのあつたコハル、そしてその係累たちとの関係と交流は、地方都市の庶民と同じ目線で生活し、その庶民の姿と暮らしを見つめ描き出す上で、不可欠であつたともいえるだろう。

『方丈記』が英訳された時に、その著者である鴨長明は、「日本のソロー」と紹介されたが、ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) が、エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) が理論として説いた「超絶主義」(Transcendentalism) の、実際の生活の実践者であつたことを考えれば、モラエスも同様に、日本の庶民の生活の実践者であつたとみなしてもよからう。

3. 徳島の印象

徳島にやって来た時の第一印象が「これ緑」というものであつたが、この印象は、モラエスが日本に初めてやって来る前に、書物から得ていた日本に対する印象と大きく変わるものではなかつたはずである。同時にそれは、都会や文明を嫌い、地方の田舎や自然に目を向けるようになったヨーロッパの同時代の知識人たちの傾向に合致したものである。

夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されていたごくささやかな住所に歩いて行ったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑・・・・という圧倒的な、だが快い印象であつた！ 陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！・・・何ひとつ考えることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。(59-60)

旅に疲れ、病気でいささか衰弱してゆっくりゆっくり歩いてゆく二軒屋の長い道沿いの左手に、家並を見下ろすように、一面草のビロードにおおわれた、松の影濃い美しい山がもったいぶつた様子で聳えている。そして、その山と近くの田畑から繁茂する植物のいがらっぽいにおいが

鋭く私の鼻をつく。創造者、変容者としての永遠の営みにいそしむ母なる自然から発散する生の神秘的発酵物の香気のように。緑、緑、緑一色！・・・ (60-61)

激しく眩惑するかのようにな意に襲つたこの緑の印象は、しかしながら先述のごとく、快いものであつた、なぜなら、今思うに、私の弱り切つた精神とは決定的に相容れないことがかねてよりはっきりしていた文明化された大都會での生活、偽りの外観で飾つたその洗練された生活の苦味とはまったく無縁の田園の簡素な風景を前にして、私は独立、自由、平安の無言の暗示によって純化されていたからである。(64)

モラエスが徳島にやってきたのは7月であるが、その頃の徳島の暑さは今と同様に厳しかつたらしく、上記の引用からうかがえるまるで初夏の清々しさからはどうも少しかけ離れていたことは、妹フランシスカに書き送った絵葉書の文面からも明らかであることは前に指摘した⁵。ここに描かれているのは、緑の木々で覆われた、島嶼国日本の原型的なイメージであり、モラエスの先人たちがその文面、言葉の世界で作り上げたものであつたらう。

モラエスが、海軍の軍籍を捨て、総領事を辞して徳島にやってきたとき、先に述べた鴨長明のように、彼の意識は、ひとりの平凡な市民、庶民の意識であつた、あるいはその意識を持つとしたと言ってよい。神戸は、急速に西洋化され、また、ヨーロッパ各国の領事館や大使館が肩を寄せ合うように立ち並んでいて、その名残が神戸三宮の今の異人館の町並みとして残っている。モラエスの領事館兼住まいはそのあたりの現中央区加納町二丁目にあつたが、二階で和服姿のモラエスが友人のコートと一緒に写っているその建物は、モラエスの好みや気持ちを反映してか、伝統的な日本家屋である⁶。日本でありながら、ヨーロッパの建物そのままの建物が立ち並んだそのあたりの町並みは、モラエスの目には偽りの外観で飾つたものとして映っていたであろう。モラエスは、海軍軍人であり、外交官であり、そして領事であつた人物であるが、日本についての情報を集めるだけに終始した人物ではなかつたようである。ピエール・ロチやラフカディオ・

⁵ 「モラエスの庭(3)―異邦人のまなざし―『地域科学研究』(徳島大学総合科学部、2013年)、第3巻、pp.143-50.

⁶ 岡村多希子『モラエスの旅-ポルトガル文人外交官の生涯-』(彩流社、2000年)、233頁参照。

ハーンに影響され、日本に対する憧れを持つに至ったモラエスは、彼らの作品の中に描かれた旧き良き日本の姿を見出そうとしたと言ってもよい。

ぼくはすばらしい国、日本にいる。ここ長崎で世界比類のないこれらの木々の陰で余生を遅れたらと思う。・・・だが、みごとな景色、ほほえみにみちた、神によって祝福されたこの土地をおもいを残して去るよ。(1889年8月13日、エミリア宛)⁷

知らない者は大尉が言ったことをほんとうにするかもしれない。とにかく、文書で書いてあったり、ヨーロッパにまで渡来している陶器や屏風の時代錯誤の図柄で見たりで、珍奇に、ふつつ空想化されている日本、幻想的な風景の国、さくらの国、美人の国、軽はずみな恋の国といったような国は、世界主義が独特の性質を剥奪してしまっている大商業都市の神戸、横浜や外交の中心地、東京でさえいまではなくなっているが、人口のあまり多くない生粋に日本的なこの長崎では、まだ残存している。自然の景勝がそうした日本的な魅力を身につけて、重畳とした杉林の山なみに狭ばまった港湾は、旅行者の目をうばう最も美しい景色のひとつでもある。⁸

日本がヨーロッパに伝えられたとき、その日本は、モラエスが述べているように時代錯誤的であったろうけれども、そしてそれは今でもさほど変わらないが、富士山(フジヤマ)、芸者(ゲイシャ)の世界、あるいは浮世絵の広重(ヒロシゲ)や歌麿(ウタマロ)の世界であって、パリ万国博覧会で知られることになった旧き日本、江戸情緒の漂う日本の姿であったろう。そして現代の日本を訪れる観光客も、その旧き日本の姿、あるいは面影を求めてやって来ているのである。

モラエスが日本に憧れを抱き、初めて見た長崎の港の風景、そして、瀬戸内海を通過して神戸に至るまでに見た風景は、彼が本の中で読み取り頭の中に作り上げていた風景であったはずであり、いわばその確認であったろう。

瀬戸内海、インランド・シイ、これだけで、充分、日の出の帝国を定義できるだろう。船が本州、九州、四国の島々を縫って進むとき、海水を浴びている無数の小島が散在するので、少しも陸地を見失わないで、しょっちゅう沿岸のなぎさ近くを航行することになる。あああおした島々の風景、バラ色の風景、火の色の風景、そのうえ、驚くほど密集している杉の緑の茂み、鏡のような海面からぼっかり浮かんでいる気まぐれで小さい岩山、きものを着て道路を横切ったり畑を耕している男女、ヨーロッパに輸出する陶器や屏風や漆器の空想的題材になっている光と姿に包まれた全景、それらがすべて、つぎつぎにこの商船が進んでいく海上に姿を現してくる。これこそ、日本である。日本には荘厳な風景はないし、豪壮さもない。ここにあるのは、こまごました背景、驚嘆すべき細心な天然の配慮がはてしなくつづいて、神秘的な空想の国、幻想の国にしている風景の配列の妙である。この国は、母である土地を離れて他の天体の秘境にはいったような気がして、この世にありえないものが現実にあるものになっている。⁹

考えてみれば、われわれが日本各地、あるいは世界各地の風景を眺めて感嘆するのは、写真や映像で見たものを、直接に本物として眺め確認していることの感慨でもある。モラエスが、長崎で芸者というものを初めて見たとき、それは本の中で知っていたものの確認でもあったろう。

モラエスは、日本に何を求めようとしていたのだろうか。それは日本でグローバル化の掛け声が喧しく響き渡る今日、日本が守るべき、あるいは進むべき方向を考えるきっかけにもなるのではないだろうか。「グローバル」という言葉の意味が、経済、政治、文化、スポーツなど、それぞれ異なる立場にある人の使い方によって、さまざまに異なっていることは薄々わかっただけで、「グローバル」という言葉でお互いが通じ合っていないもどかしさを感じる時、なんらかの理解の共通基盤が持てるかもしれないのである。

モラエスは、『徳島の盆踊り』に、徳島の概観とし

⁷ 岡村多希子『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官の生涯—』、92頁。

⁸ 花野富蔵『定本モラエス全集I』(集英社、昭和44年)、

104頁。

⁹ 花野富蔵『定本モラエス全集I』(集英社、昭和44年)、105-6頁。

て、海軍軍人としての目で、その地形や地勢、町の概観を正確に捉えている。船によって徳島に着き、港町、漁師町の様子を次のように記している。

私たちは徳島に着く。

小さな川の支流、というよりも運河が形づくる絵のように美しい港は、神戸、大阪を含む近隣の港に毎日通う小蒸気船でにぎわっている。

(63)

港のそばは、船乗りたち—海の男たち、川の男たち、泥の男たち—や沖仲仕たちが通う、みすばらしい宿屋、安い飲食店、その他のこまごました品物を扱う店の集まる街区になっている。(64)

この下層民の街区の先、いくつもの橋を渡り複雑な水路の網に沿ってゆくと、別の街区に出る。(64)

モラエスは経歴の上から考えれば本来海軍の軍人である。長崎入港の様子についての記述は、詩的な捉え方でその美しさ感叹しながらも、地形の特徴など、海軍軍人のまなざしがうかがえるものでもある。その後、瀬戸内海を航海して神戸に到着するが、その瀬戸内海の風景の美しさを日本的な美しさとして捉えつつも、同じように海軍軍人としての目でその地形や地勢を眺めているのである。徳島にやって来て、徳島の概観を述べながら、実は、軍人の目で徳島を眺めている。徳島城址のある城山と、その周辺に広がる街区のそれぞれの役割り、河川の様子、網状に広がる水路や運河らしきものの様子、そしてそうしたものが封建時代から今だに色濃く残っているとしている点について、軍人としての地形の把握、地勢の掌握がなされているのである。徳島城を擁した徳島はいわば要塞都市でもあるが、ヨーロッパの各地に見られる要塞都市の類似として、読む人には理解されただけであろう。モラエスもそのあたりは心得ていて、極東の日本という、ポルトガルの人々にとって、あるいはヨーロッパの人々にとって理解しやすいように配慮している。異質なものを理解するには、類似したものから捉えていくのは自然な方法である。

ピエール・ロチやその他極東を訪れたヨーロッパ人、さらにはモラエスが尊敬していたラフカディオ・ハーンによって描かれた日本の姿は、西欧の人々に

とっておそらく今でもあまり変わることはないと思われる、富士山（フジヤマ）、芸者（ゲイシャ）の日本であったろう。だが皮肉にも、極東への憧れ、日本への憧れを強めていたモラエスが、日本の大都市で目にしたものは、西洋化を目指して突き進む日本の姿であったといえる。

この国に長く住んでいた私の知りあいのある人物—ちなみにオランダ人医師—が、ヨーロッパを広く旅したのちに数ヶ月前に戻ってきて神戸に落着いた。その興味深い手紙の中で彼は、たいていの場合ヨーロッパ人が住んでいるいわゆる欧風建築のバラック—他の言葉が見当たらない—と、たいていの場合日本人が住んでいる和風建築のバラックとが入りまじった、一貫性のない町全体のたたずまいについて、実に苦々しく語っている。彼が、医者がこんなことを私にむかって書くとはい！……私はそれらのバラックをよく知っている。神戸や横浜や長崎や日本の諸所にふんだんに見られるいわゆる欧風のそれらのバラックを。私もそれらには吐気をおぼえる。確言してもよいが、私の考えでは、この国で見受けられる不愉快でいらだたしいものの第一は、ヨーロッパ人居住者向けのそれらのバラックである。そのヨーロッパ人居住者に仕える召使の男女、家具やそれらのヨーロッパ人居住者に一般に供給されるその他の品物、そして……最後まで率直に言えば、数少ない例外を除くそれらヨーロッパ人居住者をも、その中に私は含めたい。

徳島にはこのようなものは何ひとつない。互いに相容れず、したがって、当然ながら馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和は何ひとつない。ヨーロッパ人がまだほとんどいない、西洋文化の波が非常にゆっくりとしか入ってこないここには、窓や西洋建築めいたその他のものを伴う建造物は滅多に見られない。市役所、裁判所、銀行などのような公私の大きな施設は、必要に応じてわずかばかり手を加えただけで、純粋日本建築の疑いなく気品高い外観を全体として保持している旧時代の古い家を利用している。

日本のこの地は、真の日本の国の姿を見せてくれる。これは徳島の美点のひとつである。

(70-71)

モラエスは、ここで、徳島が「真の日本の国の姿を見せてくれる」地方都市として捉えている。モラエスのその見方では、西洋化、欧風化している大都市は虚飾の都市ということになる。「馬鹿げたものを盛んに産み出すことになるふたつの異文化の接触から結果する不調和」としての「バラック」が立ち並ぶ大都市の町並みは、モラエスの目には不快極まるものと映っていたようである。

実はそのモラエスや知人のオランダ医師の思いが、21世紀を迎えている日本にもそのまま当てはまっている。「グローバル化」という時、われわれ日本人は、英語を中心とする西洋化、欧風化に何の疑問も抱かず突き進んでいる。モラエスが感じたものは、100年の時を隔てた今現在も変わらないのであろうか。

大都市に西洋風の「バラック」が立ち並び始めている日本に「真の日本の国の姿」を見出すためには、モラエスがいた時代では、彼が決心したように地方都市にゆくことがひとつの方法であったろうし、今でもそれはあまり変わるまい。徳島移住の決心は、おヨネの墓が建立されたこともあろうが、「真の日本の国の姿」を探してのことであったに違いない。モラエスが、しきりに絵葉書を買って来て姉や妹に、さらに知人たちに書き送ったのは、絵葉書が、旧き日本の姿を留めていたこともあったろうと思われる。

絵葉書が日本国内で広く使われ始めたのは1900年(明治33年)のことで、日露戦争に際して逓信省から発行された「日露戦捷絵葉書」の大流行がその後の絵葉書のブームのきっかけとなっている¹⁰。絵葉書は、江戸時代の絵図や浮世絵の性格を持ちつつ、事件や災害のニュースの性格も持っていたようで、いわば今のメディアに相当するものと考えてよいであろう。神戸にいたモラエスは、日本各地の絵葉書を購入しポルトガルに書き送っているが、現存しているモラエスの絵葉書簡集を眺めれば、あらゆるものが網羅されていることがわかる。日本各地の観光名所のものや、神社仏閣、街並みやそこに住む人々、風物、災害の様子、四季折々

のもの、干支、さらには天皇の絵葉書にいたるまで、モラエスは、こまごまと収集家のように買い求めて短信として家族や知己に送っている。考えてみれば、世界中のどこであれ、その土地の映像が簡単に得られる現在の状況と比べ、当時は、手紙や葉書、もしくは先人たちの書き残した書物に書き連ねられた言葉を通して、想像力を働かせることによってしか知ることはできなかったのである。その点で、絵葉書は視覚的な情報として非常に有効なものであったろう。

写真が発明されるまでは絵によってであったが、写真が普及するにつれて絵葉書の絵は写真に置き換わってゆく。モラエスが、日本の事情を外交官としてあるいは軍人としてポルトガルに伝えるには絵葉書の絵や写真は、実に具体的で密度の濃い情報であったろう。それ故に、絵葉書を毎日のように書き送ったモラエスが、独探、即ちドイツのスパイとの疑いをかけられてしまったのもあながち的外れでもなかったといえる¹¹。

写真が登場したのは、19世紀中葉で¹²、それまでは絵画やスケッチであった。19世紀に家族の肖像写真がブームとして起こるが、それは時間に関心を持ち、過去と未来を意識し始めた19世紀という時代から生まれたものであり、写真はその時の時間を停止させ、その時を未来へと永遠化することに他ならない。絵画としての肖像も、年老いてゆく人間の、ある一時期を捉え停止させるものであったのである。写真の技術が登場し普及し始めると、肖像画に代わって人物写真や家族写真が流行する。いずれにしても、時間を停止させ留めることである¹³。写真の技術が進歩するにつれて、およそ人の目に入るあらゆるものが記録のように撮影されることとなるが、特に風景については、初期の写真は絵画から構図を借りてピクチャレスクな雰囲気を楽しんで写し取ったようである¹⁴。

モラエスが集めた絵葉書は膨大な数に上る。モラエス館に所蔵のものは、609通で、その他にも京都外国語大学にも絵葉書が所蔵されている。また、リスボン在住の故マルティンス在日ポルトガル大使の夫人であったイングリッド夫人の許には、まだ100枚前後の絵葉書が未整理の状態であるとのことである¹⁵。すべて

¹⁰ 田邊幹「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館紀要』第3号、2002年、pp.73-83参照。並びに、佐藤征弥他「モラエスの三つの絵葉書簡集」『徳島大学地域科学研究』第3巻、2013年、pp.128-139参照。

¹¹ 林啓介『美しい日本に殉じたポルトガル人』(角川選書、平成9年)、183-93頁参照。

¹² カロタイプ、ダゲレオタイプが、それぞれ1835年、1837年に英仏海峡を挟んで発明されている。富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』(青土社、1995年)、106頁参照。

¹³ 前掲書、14-23頁参照。

¹⁴ 前掲書、106-7頁参照。

¹⁵ 佐藤征弥、宮崎隆義が2015年3月8日ご自宅を訪問した

を網羅することは不可能であるが、岡村多希子氏が邦訳した『モラエスの絵葉書書簡集』、さらにポルトガルのオリエンテ財団から 2004 年に出版されたモラエスの絵葉書書簡集『モラエスの日本での滞在と放浪』¹⁶を見ると、モラエスが買い集めて書き送った絵葉書の概要を知ることができる。絵葉書と、その裏面に書かれた文面とはほとんど関係のないことは『モラエス絵葉書書簡集』でもうかがえるが、モラエスが買い集めていた絵葉書は、日本各地の名所の風景物が多い。名所の絵葉書は、写真が登場する前から絵で描かれたものを写真化したものとなっている。葛飾北斎の『富嶽三十六景』や歌川広重の『東海道五十三次』や『名所江戸百景』の版画絵など、各地の名所の図会は、まさにピクチャレスクなものとして定型化された風景でもあり、そのような風景や類似の風景が、各地で実写の風景写真として絵葉書となっているのである。

4. 徳島の風景

モラエスが書き送った徳島県内の風景や風物を扱った絵葉書の多くは、県内の書店や商店から発行されており、徳島市内のものや石井あたり、小松島や鳴門、さらに池田や祖谷などのものが中心であり、徳島でも当時絵葉書がブームであったことが察せられる¹⁷。

この頃の風景は、名所案内の傾向が強いが、その名所は大まかに言えば、日本的な風景ということになる。小松島海岸の風景などは典型的な風景画、あるいは図会がそのまま写真となった印象で、遠近法や構図、視点などが似ている。風景ばかりでなく、徳島市内や近郊の名所、眉山の天皇像の写真、五重の塔の写真、徳島公園あたりの写真なども典型的な観光写真であって、今日でも目にするものと大差はないといってよい。こうした写真は、モラエスにとっては「真の日本の国の姿」を垣間見せるものであり、モラエスが先人たちの文章から想像を働かせて見ていたもの、いわば心眼で見ていた風景であつたらうと考えられる。

本テーマについては、今後、稿を改めて、『徳島の盆踊り』並びに『おヨネとコハル』について、風景や風物についての記述と、現存して目にするのできる絵葉書から、モラエスの風景に関する美意識と、日本人であるわれわれ読者の美意識とを詳細に比較考察していきたい。

参考文献：

- ヴェンセスラウ・デ・モラエス、岡村多希子訳。『徳島の盆踊り』ことのは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年。
- 岡村多希子。『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』東京：彩流社、2000年。
- 紀貫之。『土佐日記 貫之集』（新潮日本古典集成）東京：新潮社、1988年。
- 田邊幹。「メディアとしての絵葉書」『新潟県立歴史博物館紀要』第3号、2002年。
- 富山太佳夫。『ダーウィンの世紀末』東京：青土社、1995年。
- 花野富蔵。『定本モラエス全集 I』東京：集英社、1969年。
- 林啓介。『「美しい日本」に殉じたポルトガル人』東京：角川選書、1997年。
- Permanências e Errâncias no Japão*, Lisboa: Fundação Oriente, 2004.
- Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori,, em Tokushima (Caderno de impressões intimas)*. PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

際にお聞きした。

¹⁶ *Permanências e Errâncias no Japão*, Fundação Oriente, 2004.

¹⁷ 佐藤征弥他、「モラエスの三つの絵葉書書簡集」『地域科学研究』第3巻、132-3頁参照。